

《座談会・「ズッコケ三人組」シリーズを語る》

## 三人組と遊んだきみたち、わたしたち



宮川健郎・飯塚宣明・牧野節子  
司会 奥山 恵（編集部）

「ズッコケ」シリーズとの出会い

奥山 本日は、「ズッコケ三人組の大研究」を編まれた評論家の宮川健郎さん、「ズッコケ」ファンクラブ会長を務められた飯塚宣明さん、そして、デビュー作『極悪飛童』（文溪堂）以来、那須さんとの親交もあり、エンターテインメントの路線を開いてこられた作家の牧野節子さんにお集まりいただきました。「ズッコケ三人組」という大きなシリーズについて、いろいろな角度から語りあえればと思います。

まずは、「ズッコケ」シリーズとの出会い、あるいは那須さんとの出会いということでお話しくさいますか。

宮川 ぼくは那須さんといえば一九八〇年の『ぼくらは海へ』という作品に非常に衝撃をうけていました。この作品は子どもをめぐる問題を書きながらも、それまでの現代児童文学と違って、必ず子どもが問題を乗り越えられるかどうかかわからない、ということを書いてしまった。でも、それでむしろ子ども読者には風通しがよくなったかもしれない。八一年の『季刊児童文学批評』創刊号に『ぼくらは海へ』のことを書いたんですね。その

後『花のズッコケ児童会長』の文庫の解説を書いたことがきっかけで、那須さんの仕事を「ズッコケ」の方から回り込んで捉えたいと思った。やはり当時『うわさのズッコケ株式会社』の解説を書いた石井直人さんと二人で『大研究』の企画をポプラ社に持ち込んだんです。

飯塚 私は、小学校六年生の夏休みに感想文を書かなければということと、住んでいた中野の明屋書店の児童書コーナーに行きました。そこで目についたのが、前川先生の絵の『それいけズッコケ三人組』で、以来「ズッコケ」の新作や那須正幹という作家の本を読むようになったんです。ハチベエは同級生のだれ、ハカセはだれそれ、モーちゃんは自分と、こちらの世界にあてはめて読めるところが、窮屈さがなくてしっくりきました。その後、中学生になって『ズッコケ時間漂流記』のあとがきで、読者からのおたよりに返事を書いているというのを読んで、人生はじめてファンレターを書いたんです。本当に返事が来てものごくうれしくて、そのうち普通のファンレターじゃ飽き足らなくなって『とびだせズッコケ事件記者』に触発されて「ズッコケ日